

第6室 書跡—日本の古經典—

N13-1 梵網經（ぼんもうきょう）

紺紙に金泥（きんでい）の界線をほどこした料紙に、『梵網經』を書写しています。整然とした美しい書風で、『古今目録抄』（ここんもくろくしょう）には聖徳太子の筆とありますが、平安時代前期の書写と推定されています。この頃の紺紙金字經は、断簡として遺っている例はあるものの、卷子のまま完存して伝えられているものは珍しくて貴重です。

N14-1 仏名經（ぶつみょうきょう）

『仏名經』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた經典で、菩提流支（ぼだいるし）訳の12巻本がよく知られています。この仏名經は過去、現在、未来の3巻構成で、それぞれ千の仏名をあげるものです。各巻の奥書により、永治元年（1141）に五師隆慶（ごしりゅうけい）が先師林幸大師（りんこうたいし）の一周忌を供養し、同時に仏名会を催して、この經を施入したことがわかります。

N9 經帙（きょうちつ）

經帙は經卷をたばねて包むために用いたものです。細い竹籤（たけひご）を、各色に染めた撚糸で暈縹（うんげん、濃い色から淡色へとぼかしてあらかわすこと）に編み上げていましたが、表面はすれてほとんど欠失しているため文様はわかりません。この經帙の四周は、後世の作と思われる紅地の蓮唐草文と輪宝雲形文の金欄による縁（ふち）が付けられ、裏面には淡縹（うすはなだ）色の裏裂を貼って補修されています。

裏裂の銘文には、建久年間（1190～1199）に源頼朝より寄進されたものの、大破のため宝永4年（1707）12月に修理が行なわれたことなどが墨書されていて、金欄もその修理の際に付け替えられたものでしょう。なお、奈良・法隆寺には、同じ銘をもつ經帙が2枚遺っていて、もとはこれらが一具であった可能性も考えられています。

第6室 染織—さまざまな染織の技法—

今回は「さまざまな染織の技法」をテーマとして、法隆寺に伝来した染織品における織りや染めの様々な技法を網羅的に取り上げます。飛鳥時代から奈良時代にかけて多様に花開いた染織美術の世界を概観して頂ければ幸いです。

纈纈（こうけち）

絹織物を小さくつまんで糸で強く括り、そこだけ染まらないようにする「しぼり染め」の技法。飛鳥から奈良時代において、こうした織物はおもに褥（じょく）という敷物の裏地として用いられました。

I-336-5 緑地目結文纈纈平絹（みどりじめゆいもんこうけちへいけん）

I-336-7 青地二重目結文纈纈平絹（あおじにじゅうめゆいもんこうけちへいけん）

I-336-8 紺地格子襷文纈纈平絹（こんじこうしたすきもんこうけちへいけん）

I-336-13 淡茶地目結文纈纈平絹（うすちゃじめゆいもんこうけちへいけん）

I-336-16 緑地目結文纈纈平絹（みどりじめゆいもんこうけちへいけん）

夾纈（きょうけち）

2枚の木の板に対称形に文様を刻み、そこに絹織物を挟んで強くしめ、板どうしが密着した部分だけ染まらないようにする、板締め（いたぢめ）の技法。木の板には文様の部分ごとに穴をあけておき、そこから多色の染料を注ぎ入れることで、鮮やかな文様を表わしました。

I-336-19 赤地花卉文夾纈羅（あかじかきもんきょうけちら）

綾（あや）

普通の平織物では、経（たて）糸・緯（ぬき）糸が一本ごと交互に交差するのに対し、綾は規則的に糸を織り飛ばすことで文様を表わした織物。飛鳥から奈良時代にかけて綾織物は幾何学的な文様から具象的な文様へと発展し、龍や鳳凰など、多彩な文様が表わされました。

I-336-28 白地双竜二重連珠円文綾（しろじそうりゅうにじゅうれんじゅえんもんあや）

I-336-34 白地花枝唐草文綾幡足（しろじはなえだからくさもんあやばんそく）

I-336-39 赤紫地双鳥連珠円文綾（あかむらさきじそうちょうれんじゅえんもんあや）

I-336-42 緑地花文綾（みどりじはなもんあや）

I-336-46 淡縹地七曜文入亀甲繫文綾（うすはなだじしちようもんいりきっこうつ）

なぎもんあや)

経錦 (たてにしき)

経錦は古墳時代の後期から奈良時代の初めにかけて行われた古い技法。経糸に複数の色糸を用い、必要な色を任意に表面へ持ち上げることで文様を表わしました。一色を表わすにしても複数の異なった色糸を必要とするため、あまり多くの色数を用いることができず、文様も比較的小ぶりの点に特徴があります。

I-336-44 縞地花文錦 (しまじはなもんにしき)

I-336-61 雑色変り菱花文錦 (ざっしょくかわりいしだたみはなもんにしき)

I-336-65・66 赤地花鳥入連珠円文錦 (あかじかちょういりれんじゅえんもんにしき)

I-336-69 淡茶地双鳳連珠円文錦 (うすちゃじそうほうれんじゅえんもんにしき)

I-336-77 緑地花文錦 (みどりじはなもんにしき)

緯錦 (ぬきにしき)

緯糸に複数の色糸を用いた織物。我が国においては奈良時代以降発展に、現代にまでつながっています。織機にはじめから張られた経糸と異なり、自由に色糸を入れることが可能なことから、多彩で大柄な錦の文様表現が可能となりました。

I-336-72 黄地唐花文錦 (きじからはなもんにしき)

I-336-81 縞地入子菱繫文錦 (しまじいりこびしつなぎもんにしき)

雑色織 (ざっしょくおり)

複数の色糸を撚りあわせた柰糸 (もくいと) を用いた風変わった織物。緋のような独特の味わいがあります。

I-336-87 雑色横縞裂 (ざっしょくよこじまぎれ)

I-336-88 雑色横縞裂 (ざっしょくよこじまぎれ)

氈 (せん)

ヒツジと思われる動物の毛を濡らし、圧力をかけたうえで乾燥させ、毛どうしをからませてできています。今日のフェルトにあたるもので、色々に染めた毛をはめ込むことで、文様が表されました。

I-336-107 白地花文氈 (しろじはなもんせん)